

葛飾区史編さんだより Vol.8

総務部 総務課 区史編さん担当係 03-5654-8444
郷土と天文の博物館 03-3838-1101

葛飾区



平成 26 年 10 月 25 日(土)午前 10 時から、金町地区センターにて「昭和の葛飾を伺う会」が開催されました。

多くの方にご参加いただき、金町にまつわる様々なお話を伺うことが出来ました。



共同水道

金町浄水場は大正 15 年に給水を開始しました。当初は、東京の東郊の町村のなかでも、伝統的に飲み水の確保が困難だった南・飾郡、南足立郡、北豊島郡の、小松川町、砂町、大島町、亀戸町、吾嬭町、寺島町、隅田町、千住町、南千住町、三河島町、日暮里町、尾久町などへ給水されていました。

当時の葛飾区域は、水質の良い井戸水を持つ家が多く、また水道を引く経費が高額であったため、金町浄水場の水は使わずにいました。しかし、昭和に入ると相次いで大きな工場が操業を開始し、そのなかには大量の地下水を使う工場も現れ、隣接する民家では井戸が枯れてしまったり、水質が著しく悪くなる場所が続出しました。そのため、昭和 8 年以降、順次、葛飾区にも金町浄水場の水が供給されるようになりました。しかし、新興住宅地のなかには金町浄水場の給水が追いつかないところも多くありました。結果的に葛飾区域すべてに金町浄水場の水が行き渡るようになったのは、昭和 48 年のことでした。

こうした近代上水道と、急速に都市化する町の水道需要の隙間を埋めるのに貢献したのが、私設水道でした。金町ではこの私設水道は、「井戸水道」と呼ばれていました。金町の篤志家によって経営され、戦後になっても利用されていました。水道管の埋設も自分の土地を使って出来るような大きな土地の所有者が経営していました。

「井戸水道」という名前が示す通り、地下水を井戸のように汲み上げてタンクに貯蔵し、給水するという方法でした。金町では 3 か所にこのタンクが設けられていました。こうした私設水道は、これまで歴史の表面に出ることは少なかったのですが、葛飾区のように急速に都市化を遂げた地域では、区民の生活を支えるきわめて重要な役割を果たしていたといえます。

商店街

金町には、現在も江戸時代の水戸街道の道筋が随所に残っています。とくに金町 5 丁目の栄通り商店街は飲食店も多く、昔の街道を印象付けながら発展してきました。

金町にはすずらん通り商店街や東通りなど、昔からの商店街も多くあります。

東通り商店街では毎月縁日も行われ、露天商なども出て多くの人たちで賑わいました。すずらん通りには映画館もあって、休日には三郷市や水元の人たちも訪れました。



「昭和 22.9.19 日金町櫻土手 決壊 現状」

キャスリン台風と進駐軍

平成の今日にも、なお、生々しく語り継がれる昭和 22 年のキャスリン台風ですが、当時はアメリカを主体とする占領軍が日本を占領していた時代でした。

江戸川の堤防を爆破して洪水流を逃がすという計画もあったのですが、占領下ということもあって爆弾の使用には GHQ の許可が必要でした。また、現場にはアメリカ兵も派遣されました。

ところが、このことが思わぬ事態を発生させました。堤防切開の実働部隊である地元金町の青年団とアメリカ兵の間では言葉が通じません。身振り手振りでは意思の疎通がはかれず、作業は進みませんでした。

このことが江戸川堤防の切開の遅れの一因になり、結果桜土手が決壊して被害を大きくしてしまいました。

また、救援物資もアメリカから配給されましたが、日本人にはなにが入っているか理解できず、貰ったものがち合ったり不要なものを貰ってきたりということが頻発しました。

占領下でしたが金町では日常はアメリカ人を見ることは少なく、水害の救援に来たアメリカ兵を目の当たりにして、「女や子供はかどわかされる。（※連れ去られる、の意）」とおびえる人も多かったそうです。

葛西おしゃらく

金町浄水場のある場所は尻手(しつて)と呼ばれていました。ここには現在柴又 3 丁目に移転した良観寺がありました。「尻手の観音様」と呼ばれて、地元の人たちに親しまれていました。

良観寺では葛西おしゃらくと呼ばれる念仏踊りが催されることがありました。

葛西おしゃらくは、現在江戸川区中葛西のものが東京都の無形文化財に指定されていますが、かつては東京東郊の農村の女性たちによって盛んに行われていました。「そうだよ節」「白粉粉屋」などの演目がありました。

また、大師送りといって弘法大師の木像を厨子に入れて担ぎ、信者の家を送り廻して歩く行事も行われることがありました。

紙芝居作家 加太こうじさん

紙芝居作家として有名な加太こうじさんは金町に住んでいて、多数の日本芸能史に関する著作を著しました。

紙芝居は、戦後日本の子供たちに愛された大衆芸能の一つですが、浅井清二さんの著書『紙芝居屋さんどこ行った』によると、紙芝居の最盛期である昭和 20 年代には 300 人あまりの紙芝居屋さんがいたそうです。

加太さんは、そのなかでも代表的な存在として知られていました。

モスリン池

金町駅北口にあった大東紡績金町工場は、通称「金町モスリン工場」と呼ばれていました。金町のランドマークとしても重要な工場です。繊維を扱う女工さんが大勢勤務していました。

勤務条件をめぐって労働争議が頻発したことで記憶に残る工場です。

この工場の付近にモスリン池と呼ばれる池があって、エビ釣りの名所として知られていました。昭和 12 年の地形図を見ると、大東紡績工場の西側、現在のイトーヨーカドー金町店の付近から、東金町小学校までを含む付近に広がるひょうたんの形に似た、かなり大きな池を確認できます。

「伺う会」では、毎回池の話題が出てきます。池の生成原因はさまざまですが、近代の葛飾区内で見られた池は、都市開発に伴って掘られた池が多いようです。線路を作るため、あるいは学校などの施設を作るのに必要な土砂を得るために掘られた池の話があちこちにあって、葛飾区の景観的な特徴を作っているようです。この大きなモスリン池も人工的な池であるかもしれません。はたして明治 13 年に作られた「迅速図」には、池らしきものはこの地に見当たらず、大東紡績、三菱製紙など周辺に存在した工場用地を得るため、耕地を掘り下げて出来た池である可能性が出てきました。戦後、この池は石炭の燃えかすで埋められ、現在の宅地になったそうです。